



TITLE:

『恋人の嘆き』(1609年)の現代綴り テキストとその翻訳

AUTHOR(S):

依田, 義丸; 高谷, 修; 桑山, 智成

CITATION:

依田, 義丸 ...[et al]. 『恋人の嘆き』(1609年)の現代綴りテキストとその
翻訳. 英文学評論 2012, 84: 1-34

ISSUE DATE:

2012-02

URL:

https://doi.org/10.14989/RevEL_84_1

RIGHT:

『恋人の嘆き』（1609 年）の 現代綴りテキストとその翻訳

依 田 義 丸
高 谷 修
桑 山 智 成 訳*

これまで *A Lover's Complaint* の翻訳は西脇順三郎訳、成田篤彦訳、大塚定徳・村里好俊訳の三度出版されたのみである。¹ シェイクスピア作と銘打たれた作品の中でも、この詩は翻訳された回数が極めて少ない作品と言える。² 本翻訳は、英詩翻訳の一つの試みとして、英語行と日本行との一致や、直訳に近い日本語を心がけた。これは、この詩特有の複雑な文法構造や凝縮した比喻や

* 翻訳作成は、一人が 3 連分を翻訳した原稿を三人で詳細に検討し、作品を分析しながら改訂するという過程を順番に繰り返した。テキスト校訂と韻律分析は主に桑山が担当した。本稿の主眼は Quarto 版の校訂と訳出にあるので、注釈はここでは最小限に留めた。

1 西脇訳は『シェイクスピア全集』第八巻、(筑摩書房、1967 年)。成田訳は『シェイクスピア「恋人の嘆き」とその周辺』(英宝社、1995 年) 319-423。大塚・村里訳は『新訳シェイクスピア詩集』(大阪教育図書、2011 年) 223-244。

2 この詩は 1609 年初版のシェイクスピアのソネット集の巻末に(作者の名前付きで)印刷されている。しかし 19 世紀初頭からこの詩の作者は誰か、シェイクスピアか否か、といった議論が繰り返されてきた。1960 年代にシェイクスピアの作であるという意見が主流になったが、近年 Brian Vickers が John Davis of Hereford を作者とする新たな説を展開している。Brian Vickers, *Shakespeare, A Lover's Complaint, and John Davis of Hereford* (Cambridge UP, 2007)。

意味を日本語に反映させるためである。また、校訂された現代の版ではなく、初版の 1609 年 Quarto 版（四つ折り版）をできる限り忠実に翻訳した点も新たな試みとなっている。³ 対訳形式を採り、英語テキストにはこの Quarto 版を現代綴りに直し、適宜校訂したものを掲載した。Quarto 版には植字工のミスももちろん含まれているだろうが、特に句読点に関しては（現代英語としては読みにくい場合でも）行の勢いや小休止が反映されている可能性も考慮し、できる限り踏襲した。行の中で大文字で始められている単語もそのまま残した。下線部は韻律のリズムが弱強格から強弱格へと変わる詩脚である。⁴

3 1609 年は日本の暦では、徳川家康が江戸幕府を開いて 6 年後の慶長 14 年にあたる。日本とこのように時間的文化的隔たりを認識することも有意義なことかもしれない。

4 強弱格になるかどうかは、解釈に依る箇所があることもここで断っておきたい。

A Lover's complaint.

BY

WILLIAM SHAKE-SPEARE.

『ある恋人の嘆き』

ウィリアム・シェイクスピア作

FRom off a hill whose concave womb reworded,⁵

A plaintful story from a sist'ring vale

My spirits t'attend this double voice accorded,

And down I laid to list the sad-tun'd tale,

5 この詩は一つの連が弱強五歩格の7行で構成されており、ababbccの脚韻を踏む形式（rhyme royal）で書かれている。

本注釈ではこの詩の特徴の例として第1連を少し詳しく指摘しておきたい。まずは高松雄一氏が指摘するようにこの連は、“my spirits” (3), “I” (4) と語り手が自分に言及する唯一の連である（「物語の奥には何があるのか——『恋人の嘆き』解釈のこころみ——」『「恋人の嘆き」とその周辺』6）。これ以降、語り手は自分に言及することはない。

「こだま」と語り手の「耳をすます」という行為に関連して、同じ音が繰り返されることは注目に値する。1行目はf音、h音、k音、w音、d音がそれぞれ近い距離で繰り返されながら展開する。2行目ではl音やt音、s音が繰り返される。3行目ではs音が引き継がれ、さらにd音が繰り返される。4行目でもs音が、そしてt音とl音の繰り返しがあり、5行目ではl音が引き継がれ、p音とf音が繰り返される。6行目ではr音が五度繰り返された後、行末の“a-twain”でw音が入り、7行目では、こだます娘の嘆きを音写するかのように、r音とw音がほぼ交互に4回繰り返される。丘のこだまに“reword”という詩人の行為が重ねられているのもおもしろい。加えて、始めの3行に現れる“A hill”, “a plaintful story”, “a sist'ring vale”, “a fickle maid”といった表現において繰り返される不定冠詞が「こだま」を対照的に引き立てている。

また、6行目と7行目ともに行頭の詩脚では弱強格が強弱格となっており、娘の嘆きの激しさを伝えている。

Ere long espied a fickle maid full pale 5

Tearing of papers breaking rings a-twain,

Storming her world with sorrows' wind and rain.

子宮のような丘の窪地は繰り返した、
 隣の谷から聞こえてきた悲しい話を。
 私の心はその二重の声に聞き耳をたてた、
 そして私は腰を下ろして、この哀しい調べの嘆きを聴いた。
 ほどなく見つけた、青ざめて動転している娘を。
 彼女は手紙を破り指輪を二つに壊して、
 悲しみの風と雨で彼女の世界に嵐を起こしていた。

Upon her head a platted hive of straw,
 Which fortified her visage from the Sun,
 Whereon the thought might think sometime it saw 10

The carcass of a beauty spent and done,
Time had not scythed all that youth begun,

Nor youth all quit, but spite of heaven's fell rage,
 Some beauty peep'd, through lattice of sear'd age.

彼女の頭には麦で編んだ帽子、
 それは日の光からその顔を護っていた。
 それを見て、時に思う考えもありえよう、
 今では費やして衰えた美の残骸だと。
 「時」は若さが始めた全てを刈り取ってはいなかった、
 また若さも全て去ってはいなくて、天の凄まじい怒りにも拘らず、
 美が少しだけ、萎れた齢の格子から覗いていた。

Oft did she heave her Napkin to her eyne, 15

Which on it had conceited characters:

Laund'ring the silken figures in the brine,

That seasoned woe had pelleted in tears,

And often reading what contents it bears:

As often shrieking undistinguish'd woe, 20

In clamours of all size both high and low.

度々、彼女はハンカチを目まで運んだ、

奇抜な刺繍の意匠があるハンカチを。

彼女はその絹の模様を塩の涙で洗った。

熟れた悲しみがその涙を丸い玉にしていた。

そして度々そこに盛り込まれた内容を読み取りながら、

わけの分からぬ悲しみを度々泣き叫んでいた、

高く低く叫び声をさまざまに上げて。

Some-times her levell'd eyes their carriage ride,

As they did batt'ry to the spheres intend:

Sometime diverted their poor balls are tied,

To th'orbed earth; sometimes they do extend, 25

Their view right on, anon their gazes lend,

To every place at once and nowhere fix'd,

The mind and sight distractedly commix'd.

時には、狙いを定めた彼女の目は砲架車に乗る、

まるで天球を狙う大砲のように。

時には反対に、衰れな球は

円形の大地に結びつけられる。時には目は

その視線を真っ直ぐ前に向けるが、すぐにその眼差しは、

あらゆる場所に向けられ何処にも留まらない。

心と視線がちぐはぐに結びつけられているからだ。

Her hair nor loose nor ti'd in formal plat,
Proclaim'd in her a careless hand of pride; 30
For some untuck'd descended her sheav'd hat,
Hanging her pale and pined cheek beside,
Some in her threaden fillet still did bide,
And true to bondage would not break from thence,
Though slackly braided in loose negligence. 35

髪は乱れもせず、きちんと編まれもせず、
誇りを持ちながらも、彼女の手入れの至らなさを示していた。
髪の一部は麦藁帽子の中に収められずに垂れ下がり、
青ざめやつれた頬にかかっていた。
別の一部はリボンの中に収まり
束縛に従順でそこから脱しようとはしなかった、
無造作に緩やかに結ばれていたものの。

A thousand favours from a maund she drew,
Of amber crystal and of beaded jet,⁶
Which one by one she in a river threw,

6 この詩は、第一連目のような音声的工夫だけでなく、こうした豊かな色彩性や視覚性にも特徴がある。“amber crystal”にはカンマがないので（そもそも当時、カンマは、現代英語のように意味を明確にするような方法で常に打たれたわけではない）、「琥珀クリスタル」と一つの物として解釈することもできる。Quarto 版では、“beaded”は“bedded”と印刷されており、「黒玉が埋め込まれた贈り物」という意味かもしれない。しかしここでは、“bedded”と“beaded”は当時同じ発音であったとする現代の多くの編者の意見に倣い、“beaded”を採った。

Upon whose weeping margent she was set,
Like usury applying wet to wet, 40
Or Monarchs' hands that lets not bounty fall,
Where want cries some; but where excess begs all.

幾多の贈り物を枝編み籠から彼女は取り出した、
たとえば琥珀、水晶、黒玉ビーズ。
そしてそれらを一つ一つ川へと投げ入れた、
泣き濡れた土手に座り込みながら。
彼女はまるで高利貸しの様に川の水を涙の水で増やす、
あるいはまるで君主たちの手の様に恵みを降らす、
困窮が僅かを求め叫ぶのではなく、過剰が全てを欲しがる所に。

Of folded schedules had she many a one,
Which she perus'd, sigh'd, tore and gave the flood,
Crack'd many a ring of Posied gold and bone, 45
Bidding them find their Sepulchres in mud,
Found yet mo letters sadly penn'd in blood,
With sleided silk, feat and affectedly
Enswath'd and seal'd to curious secrecy.

折りたたまれた手紙も彼女は沢山持っていた。
それらをじっと読み、溜息をもらし、ひき破り、川に流した。
愛の言葉が刻まれた多くの金や象牙の指輪を叩き割り
泥の中に墳墓を見つけよとそれらに命じた。
次に目についたのは、深刻に血で書かれたさらに多くの手紙。
それらは、ほぐした細い絹で繊細に愛情こめて
束にされ、秘密を守るためしっかり封印されていた。

These often bath'd she in her fluxive eyes, 50
 And often kiss'd, and often gave to tear,⁷
 Cried O false blood thou register of lies,⁸
What unapproved witness dost thou bear!
Ink would have seem'd more black and damned here!
 This said in top of rage the lines she rents, 55
 Big discontent, so breaking their contents.

彼女は、その手紙を潤んだ目で幾度も見つめ、
 幾度もキスし、幾度も涙で濡らし、
 そして叫んだ。ああ偽りの血よ、嘘を記録するお前は、
 なんという虚偽の証言をするのだろう！
 インクだったらもっと黒く呪われて見えたのに！
 こう言って、怒り極まって、手紙を引きちぎり、
 大いに腹を立てて、中身を破る。

A reverend man that graz'd his cattle nigh,
 Sometime a blusterer that the ruffle knew
 Of Court of City, and had let go by
 The swiftest hours observed as they flew, 60

7 現代の版の多くが“gan to tear”という Edmund Malone 以来の変更を引き継いでいる。

8 現代の版では必ずここで引用符が付けられるが、もともとの Quarto 版には引用符はないので、この版でもそれを踏襲した。慣習の違いといえはそれまでかもしれないが、こうすることによって、語りに対する我々の印象や行の流れは若干変わってくるのではないだろうか。そもそもこの詩は“Cried”, “This said”などの表現で、語った内容を明らかにしている。これ以降の娘の語りや、その中での若者の語りに対して、現代の版では各連の最初に引用符が付けられているが、このテキストでは一切使用しなかった。

Towards this afflicted fancy fastly drew:⁹
 And privileg'd by age desires to know
 In brief the grounds and motives of her woe.

一人の老人が近くで牛に草を食ませていた。
 かつては自慢屋で、宮廷や都市の
 派手さを知り、早く流れるように見受けられる時を
 過ぎゆくに任せていたものだったが、
 この心に痛手を負った娘の傍に近づいた。
 そして歳に免じて手短に聞きたがるのは
 娘の悲嘆の理由と原因である。

So slides he down upon his grained bat;
 And comely distant sits he by her side, 65
 When he again desires her, being sat,
 Her grievance with his hearing to divide:
 If that from him there may be ought applied
 Which may her suffering ecstasy assuage
 'Tis promised in the charity of age. 70

こうして、使い古した杖を頼ってゆっくりとしゃがみ、
 ほどよく離れて娘の傍らに坐る。
 そして老人は、坐ったまま、更に願って、
 娘の悲しみを彼に語って軽くするよう求めた。
 もしも彼に出来ることがあって
 狂わんばかりの苦しみを和らげられるとしたら

9 “Towards” は 1 音節。60 行から 61 行にかけて、“flew”, “afflicted”, “fancy”, “fastly” のように、f 音が多用されている。

それは老いの慈愛にこそ望まれよう。

Father she says, though in me you behold¹⁰

The injury of many a blasting hour;

Let it not tell your Judgment I am old,

Not age, but sorrow, over me hath power;

I might as yet have been a spreading flower

75

Fresh to myself, if I had self applied

Love to myself, and to no Love beside.

おじいさん、と娘は言う、もしもあなたが
人を萎びさせるような長い時間がつけた傷を私の顔に見ても、
私が老いていると判断しないで下さい。
老いではなく悲しみが私に力を振っているのです。
私は今も満開に向かう
自分にとって瑞々しい花だったかもしれません、もしも私が
愛を自分に向け、他の人に向けたりしなかったら。

But woe is me, too early I attended

A youthful suit it was to gain my grace;

10 “Father”という言葉は、多くの評者が指摘するように、カトリックの司祭という意味もある。またこの老人は57行目で“reverend”と形容されているが、この言葉は「聖職の」という意味もある。この呼びかけや女性の告白という設定はカトリックの「告解」を彷彿とさせる。しかし58-60行で明示されている通り、彼は聖職者ではない。宗教性は幾度も想起されるが、宗教的清らかさに至る人物は登場しない（修道女でさえ若者の誘惑に負けてしまう）。この詩は「告解」やその形式をとった当時の詩のパロディーにさえ見える。成田氏の見解では、語り手は欲求に揺れる人間の姿を冷ややかに見ている（成田篤彦、「情欲と欺瞞——『恋人の嘆き』論」、『シェイクスピア「恋人の嘆き」とその周辺』、103-104）。

O one by nature's outwards so commended, 80
 That maidens' eyes stuck over all his face,
 Love lack'd a dwelling and made him her place.
 And when in his fair parts she did abide,
 She was new lodg'd and newly Deified.

でも悲しいことに、早まって私は
 あの若者の求愛、私の愛を得るための求愛に耳を傾けてしまったのです。
 ああ、生まれもった外見はあまりに優れていて、
 その顔は娘たちの目を強く引きつけたのです。
 愛の女神は住む所がなかったので、彼をその住み家としたのです、
 つまり、彼の優美な体の隅々に留まって、
 愛の女神は新たに居を構え、新たに神として崇められたのです。

His brown locks did hang in crooked curls, 85
 And every light occasion of the wind
 Upon his lips their silken parcels hurls,
 What's sweet to do, to do will aptly find,
 Each eye that saw him did enchant the mind:
 For on his visage was in little drawn, 90
 What largeness thinks in paradise was sawn.¹¹

彼の茶色の髪は巻き毛となって垂れ下がり、

11 顔や眼を楽園に喩えることは西洋文学の伝統といってよいだろう。Chaucer, "Paradis stood formed in hire yen" *Troilus and Criseyde* (V, 817). Dante, "chè non pur ne' miei occhi è paradiso" (「私の眼の中だけに天国があるのではないのですから」), *Paradiso*, XVIII, 21. Samuel Pordage, "Paradise doth open in the heart", *Mundorum Explicatio*, 77. John Dryden, "And paradise was opened in his face", *Absalom and Achitophel*, 30. Thomas Campion, "There is a garden in her face" (Cherry-Ripe, 1).

そしてそよ風が吹く度に
 その絹のような髪の毛を彼の唇に投げかけたのです。
 しぐさは優美なしぐさを適切に見つけ出すものなのです。
 彼を見た目はすべて、その心を魅了しました。¹²
 というのは彼の容貌には小さく描かれていたからです、
 楽園で大きく見えるものが。

Small show of man was yet upon his chin,
 His phoenix down began but to appear
 Like unshorn velvet, on that termless skin
 Whose bare out-bragg'd the web it seem'd to wear. 95
 Yet showed his visage by that cost more dear,
 And nice affections wavering stood in doubt
 If best were as it was, or best without.

大人になりかかっている様がすでに彼の顎に窺えました。
 不死鳥のうぶ毛がまさに現れ始めていたのです、
 まるでえもいわれぬ肌の上に、切り揃えられていないビロードのように。
 その肌は、纏っているような織物よりも自らの美を誇っていました。
 しかし、その飾りは顔をもっと愛らしいものにしていました。¹³
 そして眼の肥えた人の好みは揺れ迷っていました、
 今のままで最高か、無い方が最高かと。

12 伝統的に、キューピッドの矢が人の目から発せられ、相手の目の中に入り、それが下って心臓に入った時に、恋心が生まれる（例えば Petrarca, *Canzoniere* no. 2）。

13 「織物」「飾り」は若者のうぶ毛を指す。娘の語りの視点は、若者の巻き毛からさらに細かいうぶ毛へと移る。

His qualities were beauteous as his form,
 For maiden-tongu'd he was and thereof free; 100
 Yet if men mov'd him, was he such a storm
 As oft 'twixt May and April is to see,
 When winds' breath sweet, unruly though they be.
 His rudeness so with his authoriz'd youth,¹⁴
 Did livery falseness in a pride of truth. 105

彼の物腰は姿と同様に優美でした。
 話し方は乙女のように、それで天真爛漫でした。
 しかしもしも男が彼を怒らせたなら、嵐になりましたが、
 五月と四月によく見られるもので、
 その頃の風は甘美なものの、奔放でもあったのです。
 粗野さは若さの故とされ、
 「偽り」に立派な「誠実さ」というお仕着せを着せていました。

Well could he ride, and often men would say
 That horse his mettle from his rider takes
 Proud of subjection, noble by the sway,
 What rounds, what bounds, what course, what stop he makes 110
 And controversy hence a question takes,
 Whether the horse by him became his deed,
 Or he his manage, by th'well-doing Steed.
 彼は巧みに馬に乗り、たびたび人は次のように言ったものでした。
 あの馬は気性を騎手から得ているのです、

14 “authoriz'd” の強勢は 2 音節目 (John Roe, ed., *Poems* (Cambridge UP, 1992), n. 104.)。

操られて誇りに思い、支配されて高貴でいるのです、
 なんと素晴らしく回転し、跳ね、進み、静止することでしょう。
 それで次の疑問が議論の的になりました。
 馬は騎手によってその動きを自然にできたのか、
 あるいは彼が優秀な馬によって巧みな馬術を見せることができたのか。

But quickly on this side the verdict went,
 His real habitude gave life and grace
 To appertainings and to ornament, 115
 Accomplish'd in himself not in his case:
 All aids themselves made fairer by their place,
 Came for additions, yet their purpos'd trim
 Piec'd not his grace but were all grac'd by him.

しかしすぐにこちら側に有利な判決が下りました。
 彼の真の性質が命と優美さを
 付属する物や装飾品に与えていて、¹⁵
 その性質は周りの物によってではなく彼自身によって完成されていたのです。
 全て補助するものはその場所でさらに美しくされて、
 補足するためだったのに、その本来の装飾性も
 彼の優美さを補うのではなく全て彼によって優美になるだけでした。

So on the tip of his subduing tongue 120
 All kinds of arguments and question deep,
 All replication prompt, and reason strong

15 「付属する物」は彼の衣装や装飾品だけでなく馬も含まれると思われる。

For his advantage still did wake and sleep,
To make the weeper laugh, the laugher weep:
He had the dialect and different skill, 125
Catching all passions in his craft of will.

そして、人を圧倒する彼の舌先で繰り出される
様々な議論や深い疑問の提示や、
当意即妙の応えや、強い論理が
彼の有利になるように始終目覚めたり眠ったりしました。
そして泣いている人を笑わせ、笑っている人を泣かせたのです。
うまい話し方や特別な技巧を彼は持っていて、
巧みな意志の力でどんな激しい気持ちも虜にしたのです。

That he did in the general bosom reign
Of young, of old, and sexes both enchanted,
To dwell with him in thoughts, or to remain
In personal duty, following where he haunted, 130
Consents bewitch'd, ere he desire have granted,
And dialogu'd for him what he would say,
Ask'd their own wills and made their wills obey.

この結果、皆の心が彼に支配されました
老いも若きも。男も女も共に魅了されて、
想いの中で彼と共にいられるように
あるいは直接本人に仕えるように、彼がよく行く所へ付き従いました。
魅了された従順な人々は、彼が望む前から願いに応え、
彼が言いそうなことを彼の代わりに話し、
自分の意志を訊ね、そしてその意志を服従させたのです。

Many there were that did his picture get
 To serve their eyes, and in it put their mind, 135
 Like fools that in th'imagination set¹⁶
 The goodly objects which abroad they find
 Of lands and mansions, theirs in thought assign'd,
 And labouring in moe pleasures to bestow them,
 Than the true gouty Landlord which doth owe them. 140

多くの人が彼の肖像画を手に入れて
 目を楽しませ、それについて思いを巡らすのでした。
 まるで愚か者のように、世間で見た土地や屋敷といった
 美しいものを思い浮かべ
 自分の物のように考えて、
 それらを授ける楽しい妄想にふけていたのです、
 痛風を病むような本当の所有者よりもっと楽しげに。

So many have that never touched his hand
Sweetly suppos'd them mistress of his heart:
 My woeful self that did in freedom stand,
 And was my own fee-simple (not in part)
 What with his art in youth and youth in art 145
 Threw my affections in his charmed power,
 Reserv'd the stalk and gave him all my flower.

彼の手に触れたこともないとても多くの者が

16 娘の情熱的な表現と冷静な態度、その熱さと冷たさとの対照もこの「語り」の特徴の一つ。

自分のことを彼の心の所有者と甘く夢想したのです。
 今や悲しみに満ちた私は、かつては自由な身であり
 自分自身の（部分所有ではない）完全所有財産だったのですが
 若さの中にある彼の巧みさ、巧みさの中にある若さのために
 彼の魅惑的な力に愛情を委ね、
 茎だけ手元に残して自分のすべての花を彼に与えたのです。

Yet did I not as some my equals did
 Demand of him, nor being desired yielded.
Finding myself in honour so forbid, 150
 With safest distance I mine honour shielded,
 Experience for me many bulwarks builded
 Of proofs new-bleeding which remain'd the foil¹⁷
 Of this false Jewel, and his amorous spoil.¹⁸

けれど私はしませんでした、私と同じような娘たちがしたように
 彼を求めたり、欲せられて身を任せたりすることは。
 誉れの気持ちから自分自身抑えようとしていることに気づいて、
 もっとも安全な距離をとって私は操を守ったのです。
 経験が私のために多くの砦を築きました、
 新たな血を流すような失恋から。それはこの偽りの宝石の
 引き立て役であり、彼の恋の戦利品でした。

17 この行は“newly-broken hearts”（Roe）を意味するのであろうが、同時になにかしら性的な暗示を感じても不思議ではない。

18 “this false Jewel” とは不実な若者を指している。

But ah who ever shunn'd by precedent,¹⁹ 155
 The destin'd ill she must herself assay,
 Or forc'd examples 'gainst her own content
 To put the by-past perils in her way?
Counsel may stop awhile what will not stay:
 For when we rage, advice is often seen 160
 By blunting us to make our wits more keen.

しかし、ああ、誰がかつて先例によって避けたというのでしょうか、
 経験せざるをえない悪い運命を。
 あるいは、どの女が自分自身の満足に反し過去の事例を使って
 他人の経験した危険に自分の進む道を邪魔させたというのでしょうか？
 忠告は留まりたくないものをしばらくだけ止めることはできます。
 我々が欲情に駆られる時、忠告はしばしば知られています、
 鈍らせることによって心の働きをより鋭くすることを。

Nor gives it satisfaction to our blood,
 That we must curb it upon others' proof,
 To be forbod the sweets that seems so good,
 For fear of harms that preach in our behoof; 165
 O appetite from judgment stand aloof!
 The one a palate hath that needs will taste,

19 1590 年代に「女の嘆きの詩」というジャンルの流行があった。この詩はこれを意識して書かれているが、成田氏が指摘するように、前例の持つ教訓性が無効化されていることや宗教性の空洞化、作品構成という点において大きく異なる。特にこの連で、前例は欲望をむしろ強くするものとして描かれている（『シェイクスピア「恋人の嘆き」とその周辺』、91-104）。

Though reason weep and cry it is thy last.

我々の情欲に満足を与えないのは
他人の経験に基づいてそれを抑えなければならないことです。
つまり美味しそうに見えるお菓子が禁じられるようなことです、
われわれのために害を恐れるように説く気持から。
ああ、欲望よ、判断から離れていてくれ！
欲望はどうしても味わいたがる口をもっているものです、
たとえ理性が泣いて、それはおまえの破滅になるぞと叫んでも。

For further I could say this man's untrue,

And knew the patterns of his foul beguiling, 170

Heard where his plants in others' Orchards grew,

Saw how deceits were gilded in his smiling,

Knew vows were ever brokers to defiling,

Thought Characters and words merely but art,

And bastards of his foul adulterate heart. 175

更に私はこの男が不実だと分っていました、
また彼の悪しき騙しの手口を知っていました。
他人の庭に彼の植物が育っているのも聞いていました、
欺きが彼の笑顔によって金メッキされた様を見ていたのです。
誓いは汚しの取り持ちであることも知っていました、
文字と言葉は単に手管に過ぎず、
彼の偽りの放蕩心の私生児だと思っていたのです。

And long upon these terms I held my City,
 Till thus he gan besiege me: Gentle maid²⁰
 Have of my suffering youth some feeling pity
 And be not of my holy vows afraid,
 That's to ye sworn to none was ever said, 180
 For feasts of love I have been call'd unto
 Till now did ne'er invite nor never vow.²¹

長い間このような状態で自分の町を守りました、
 彼が次のように言って私に包囲戦を仕掛けるまでは。優しき娘、
 苦悶する若い私に、心から感じる哀れみを少しでも持ってください、
 そして私の神聖な誓いを恐れないでください。
 貴方に誓ったことは、今まで誰にも誓ったことはないのです。
 愛の宴うたげに私は招かれてきましたが、

20 語り手の「語り」の中で娘が「語り」、さらにその中で若者が「語る」という入れ子構造はこの詩の大きな特徴である。この構造の効果の一つは、この詩に繰り返し現れる「同一化のイメージ」を支えることである。若者が演技をしたり、悲劇を見てそれに感化されるように、彼女もここで言わば彼の演技をしていると言える。この語りの始まり方も興味深い。連の始まりではなく、連の2行目の、しかも最後の詩脚から始まることによって、彼女が自然に彼の「語り」を語り始める様を強調している。この彼女の「語り」を語り手が伝えているのだから、そもそも語り手の「語り」にも演技性や同一化のイメージがあるとも言えよう。同時に、この入れ子構造によって虚構性も高まる。若者の語ったことは本当なのか、娘の「語り」はどこまで彼女の言なのか、あるいは、そもそも語り手の報告する娘の「語り」自体がどこまで彼女の言なのか、真実はすべて虚構のヴェールに包まれることになる。この結果、娘の「語り」や恋心の勢い自体が浮き上がる。こういった虚構性の扱い方や詩の終わり方（注42を参照）にシェイクスピア的な要素を見ることができる。つまり、この詩は劇作的な発想から書かれていると言えるのではないだろうか。

21 Roe など従来の校訂者は Quarto 版の “vow” を “woo” に変更しているが、ここでは “vow” を保持した。

今に至るまで、招いたり誓ったりしたことはないのです。

All my offences that abroad you see
 Are errors of the blood none of the mind:
 Love made them not, with acture they may be, 185
 Where neither Party is nor true nor kind,
 They sought their shame that so their shame did find,
 And so much less of shame in me remains,
 By how much of me their reproach contains.

あちこちであなたが見聞きする私のすべての罪は
 たぎる血の過ちであり心の過ちではないのです。
 愛によるものではないのです。罪は行為だけに留まっていて、
 どちらの側にも真心も思い遣りもないのです。
 彼女たちは恥を求め、そうして相応しい恥を見つけました。
 だから私の許に恥はより少なくなるのです、
 私に対する彼女たちの非難が大きければ大きいほど。

Among the many that mine eyes have seen, 190
 Not one whose flame my heart so much as warmed,
 Or my affection put to th'smallest teen,
 Or any of my leisures ever Charmed,
Harm have I done to them but ne'er was harmed,
 Kept hearts in liveries, but mine own was free, 195
 And reign'd commanding in his monarchy.

私が目にした多くの女性の中で
 私の心をこれ程暖かくした炎を持つ人はいません、
 また私の愛の心をこんなにも悩ませた人はいません、

また私の自由などの時間をも、これほど魅惑した人もいません。
彼女たちの心を傷つけましたが、私は傷つきませんでした、
彼女たちの心にお仕着せを着せましたが、私の心は自由で、
君主として支配し治めていたのです。

Look here what tributes wounded fancies sent me,²²

Of pallid pearls and rubies red as blood:

Figuring that they their passions likewise lent me

Of grief and blushes, aptly understood

200

In bloodless white, and the encrimson'd mood,

Effects of terror and dear modesty,

Encamp'd in hearts but fighting outwardly.²³

見て下さい、恋に傷つけられた女性たちがどんな貢物を私に贈ったかを、
たとえば青ざめた真珠と血のように赤いルビー。
同じように示しています、彼女たちが熱い気持ちを私にくれたことを、
つまり悲しみと恥じらいの気持ちを。上手く表現されているのです、
血の気の失せた白さと、紅潮した朱色によって。
怖れと大切な慎みの表れが
心に陣取ってはいるけれど外へと戦いに出してしまうのです。

And Lo behold these talents of their hair,

With twisted metal amorously impleach'd

205

22 “wounded fancies” はペトルルカに見られるように、愛の神（Amor）の矢に傷つけられることを意味している。Cf. Petrarca, *Canzoniere*, no. 3, l.13 ferir[e].

23 心（cor）に陣取る恋心が顔に表れるという趣向は、ペトルルカの *Canzoniere* no. 140 にも見られる。

I have receiv'd from many a several fair,
 Their kind acceptance, weepingly beseech'd,
 With th'annexions of fair gems enrich'd,
 And deep-brain'd sonnets that did amplify²⁴
 Each stone's dear Nature, worth and quality. 210

そしてほら、見て下さい、これらの髪の毛の贈り物を。
 曲がりくねった貴金属の髪飾りで艶かしく撚り合わされていて、
 これらを私は多くの美しい女性たちそれぞれから受け取ってきたのです、
 どうか優しく受け取ってと泣きながら乞われて。
 それらを更に高価にしていたのは添えられていた美しい宝石と
 よく考え抜かれたソネットでした、
 ソネットはそれぞれの宝石の貴重な性質、価値、質を高めていました。

The Diamond? why 'twas beautiful and hard,
 Whereto his invis'd properties did tend,
 The deep-green Em'rald in whose fresh regard,
 Weak sights their sickly radiance do amend.
 The heaven-hued Sapphire and the Opal blend 215
 With objects manifold; each several stone,
 With wit well blazon'd smil'd or made some moan.

ダイヤモンドですか？ それは美しく硬いものでした、
 その見えない特質が作用することによって。
 深緑のエメラルド、その瑞々しい光を見ると、

24 若者の「語り」の中に、女性たちの書いたソネット（14 行詩）という「語り」が現れる。その内容は語られることはないが、語りの中の語りがさらに増えることになる。

弱視の人も病んだ目に輝きを取り戻すのです。
 サファイアは天空の色を帯びて
 オパールは様々なものと溶け合って。
 それぞれの宝石は、
 機知に富む言葉で飾られ、微笑み、あるいは嘆きの声を上げていました。

Lo all these trophies of affections hot,
 Of pensiv'd and subdu'd desires the tender,
 Nature hath charg'd me that I hoard them not,²⁵ 220
 But yield them up where I myself must render:
 That is to you my origin and ender:
 For these of force must your oblations be,
 Since I their Altar, you enpatron me.

ほら見て下さい、これら全ての熱き愛情のトロフィー、
 憂いに満ち抑制された欲望の贈り物、
 自然の女神は私にそれらを隠し持たないように命じたのです、
 むしろ私が自分を捧げるところに差し出すようにと。
 つまりあなたに、私の始まりでも終わりでもあるあなたになのです。
 これらはあなたへの捧げものとならなくてはなりません、
 なぜなら私は祭壇にすぎず、あなたが私の守護聖人だからです。

Oh then advance (of yours) that phraseless hand, 225
 Whose white weighs down the airy scale of praise.

25 Quarto 版では、210 行と 311 行の行中において “Nature” の綴りは大文字の N で始められている。このことは、この詩における “Nature” の重要性を引き立てているように思える（80 行目は “nature”）。

Take all these similes to your own command,

Hollowed with sighs that burning lungs did raise:²⁶

What me your minister for you obeys

Works under you, and to your audit comes 230

Their distract parcels, in combined sums.

ああ、ですから言葉に言い尽くせない（あなたの）その手を伸ばすのです、
その白さが、空気のような贅辞の天秤を押し下げる手を。
愛の比喩であるこれらのすべての贈り物を自分のものとするのです、
燃え上がる肺がつく溜息に虚ろにされた贈り物を。
あなたの代理人である私に従う者は
あなたの下で働いているのだから、あなたの監査に与かるのです、
個々の品々は、総まとめにされて。

Lo this device was sent me from a Nun,

Or Sister sanctified of holiest note,

Which late her noble suit in court did shun,

Whose rarest havings made the blossoms dote, 235

For she was sought by spirits of richest cote,

But kept cold distance, and did thence remove,

To spend her living in eternal love.

見て下さい、これはある修道女から贈られた物です、
清い、特に聖なることで知られたシスターからです、
彼女は最近、廷臣たちの求愛を断りました、
彼女の稀な資質ゆえに花の廷臣たちは彼女を溺愛したのです。
彼女は名だたる家柄の者たちから求められましたが、

26 現代の版のほとんどがこの“Hollowed”を“Hallowed”に変更している。

冷たく距離を保ったあと、そこから離れて、
永遠の愛に生きることにしたのです。

But oh my sweet what labour is't to leave,
The thing we have not, mast'ring what not strives, 240
Playing the Place which did no form receive,
Playing patient sports in unconstrain'd gyves,²⁷
She that her fame so to herself contrives,
The scars of battle scapeth by the flight,
And makes her absence valiant, not her might. 245

だが愛する人よ、どんな労苦だというのですか、
もともと持たない物を捨て、逆らわないものを支配し、
どんな動物も受け入れない場所に柵を立て、
拘束しない足かせをつけて辛抱強く遊ぶことが。
評判を自分のものとしようとする女性は、
逃げることで戦いの傷から逃れ、
力ではなく不在で勇敢に思わせるのです。

Oh pardon me in that my boast is true,²⁸
The accident which brought me to her eye,
Upon the moment did her force subdue,

27 John Kerrigan が解説するように、“play the ... game”には「～のふりをする」の意味がある（*The Sonnets and A Lover's Complaint*, Penguin Shakespeare, 1986, n. 242）。同時に“sports”には「ゲーム・遊び」という意味も生きているように思われる。この行は、5 詩脚のうち 4 詩脚が強弱格となっており、韻律的に目立つ行である。またこの 2 行では p 音が繰り返される点でも独特である。

28 語りの信憑性、虚構性という点で、わざわざ「本当だ」と断るのは興味深い。

And now she would the caged cloister fly:

Religious love put out religion's eye: 250

Not to be tempted would she be enur'd,²⁹

And now to tempt all liberty procur'd.³⁰

ああ、許してください、この自慢話は本当のことなのですから。

私を彼女の目に留めさせた偶然が、

すぐに彼女の力を抑えつけ、

今や彼女は鳥かごのような修道院から飛び出したいと願ったのです。

信仰心にも似た愛が信仰の視力を奪い、

誘惑されないように慣らされていたのに、

今や彼女は得た全ての自由を試そうとしたのでした。

How mighty then you are, Oh hear me tell,

The broken bosoms that to me belong,

Have emptied all their fountains in my well: 255

And mine I pour your Ocean all among:³¹

I strong o'er them and you o'er me being strong,

Must for your victory us all congest,³²

As compound love to physic your cold breast.

29 ほとんどの現代の版は“enur'd”を“immured”と校訂している。

30 Quarto 版では“procure”となっており、これでは明らかに脚韻を踏むことができない。

31 この連の意味内容は性的な含みを持っているが、それは 256 行目や 257 行目において、O という文字によっても表されている。当時の用法では、この文字は嘆きや感嘆の声を指すだけでなくゼロを示したり女性性器も象徴し得た。最終連にも同様の趣向がある。

32 動詞“congest”の意味は Roe が解説するように“to form into a single mass”の意味だろうが、「鬱血させる」という意味も重なっているように思われる。

だからあなたはなんと強いことか、ああ、私の話を聞いて下さい。
 私に属する、恋に破れた数多の胸は、
 私の泉にその全ての泉を注ぎ込みました。
 そして私はその泉をあなたの海に注ぎ込みます。
 私は彼女たちを強く、あなたは私を強く支配しているので、
 あなたの勝利のために、二人で皆の血を結集しなければなりません、
 調合した愛としてあなたの冷たい胸を癒すために。

My parts had pow'r to charm a sacred Nun,³³ 260
 Who disciplin'd, ay, dieted in grace,
 Believ'd her eyes, when they t'assail begun,
 All vows and consecrations giving place:
 O most potential love, vow, bond, nor space
 In thee hath neither sting, knot, nor confine 265
 For thou art all and all things else are thine.

私の体は神聖な修道女でさえ魅了する力をもっていました。
 その人は規律正しく、そう、神の恵みの中で清く生きていたのですが、
 彼女の目が自分を攻撃し始めた時、その目を信じたのです、
 全ての誓いと神への献身を放棄して。
 ああ、最も力強い愛よ、誓いも契約も空間も
 おまえにおいては、痛みを与えることも縛ることも制限することも出来ない。
 おまえは全てであり、他の物全てはおまえのものだから。

When thou impresses what are precepts worth

33 “My parts”は「才能」という意味も響いているだろう。“Nun”はQuarto版では“Sunne”と印刷されている。

Of stale example? When thou wilt inflame,
 How coldly those impediments stand forth
 Of wealth of filial fear, law, kindred, fame, 270
 Love's arms are peace, 'gainst rule, 'gainst sense, 'gainst shame
 And sweetens in the suffring pangs it bears,
 The *Aloes* of all forces, shocks and fears.³⁴

おまえが兵を集める時、古びた先例の教訓に
 どんな価値があるのだ？ おまえが恋の炎を掻き立てる時、
 障害がなんと冷たく邪魔立てすることだろう、
 つまり富や、子としての心配や法律や親族や名声が。
 愛の武器は平和をもたらすのです、支配や常識や恥を打ち倒して。
 そして甘くするのは、心の痛みがもたらす苦しみの中で
 全ての力や衝撃や恐れといった苦いアロエを。

Now all these hearts that do on mine depend,
 Feeling it break, with bleeding groans they pine, 275
 And supplicant their sighs to you extend
 To leave the batt'ry that you make 'gainst mine,
 Lending soft audience, to my sweet design,
 And credent soul, to that strong-bonded oath,
 That shall prefer and undertake my troth. 280

さて、私の心に結ばれているこれらの心の持ち主みなは
 私の心が壊れるのを感じて、血を流すように呻いて命をすり減らし、
 そして嘆願してその溜息をあなたに差し出すのです、
 私の心に対してあなたが行う攻撃を差し控えるようにと、

34 “*Aloes*” は Quarto 版の中で、イタリック体で印刷された唯一の単語である。

私の優しい想いに、穏やかに耳を貸すことによって。
 そして、魂に信じさせるように、あの強く固められた誓いを、
 私の真心を推奨し保障する誓いを。

This said, his wat'ry eyes he did dismount,
 Whose sights till then were levell'd on my face,
 Each cheek a river running from a fount,
 With brinish current down-ward flowed apace:
 Oh how the channel to the stream gave grace! 285
 Who glaz'd with Crystal gate the glowing Roses,³⁵
 That flame through water which their hue encloses.

ここまで言ってから、涙で潤んだ目を彼は下に向けました、
 その視点はそれまで私の顔に照準を合わせていたのですが、
 彼の両頬は泉から湧き出る川になり、
 涙の流れで下へ向かって速く流れました。
 ああ、なんと水路が水の流れに優美さを与えていたことでしょう！
 その流れは、赤く輝くバラに水晶の水門をはめ込み
 そしてバラは、その色を閉じ込める水を通して赤々と燃えているのです。

Oh father, what a hell of witch-craft lies,
In the small orb of one particular tear?
 But with the inundation of the eyes: 290
 What rocky heart to water will not wear?
 What breast so cold that is not warmed here,

35 「バラ」は若者の頬を表わす。

Or cleft effect, cold modesty hot wrath:³⁶

Both fire from hence, and chill extincture hath.

ああ、おじいさん、どんな悪しき魔術が、
あの涙の一粒一粒の小さな球体に宿るのでしょうか？
あの目からの涙の洪水で、
溶けて水へと変わらない岩の心があるのでしょうか？
あるいはそこで温まらないほど冷たい胸があるのでしょうか。
あるいは二重の効果。冷たい慎みや熱い怒りが
そこからそれぞれ火と、火を鎮める冷たさを得るのです。

For lo his passion but an art of craft, 295

Even there resolv'd my reason into tears,³⁷

There my white stole of chastity I daff'd,

Shook off my sober guards, and civil fears,

Appear to him as he to me appears:

All melting, though our drops this difference bore, 300

His poison'd me, and mine did him restore.

というのも、そう、彼の激しい嘆きが、欺瞞の技巧にすぎないあの嘆きが、
その時、私の理性を溶かして涙へと変えてしまったからです。
私は貞節の白いストールを振り捨て、
身を慎むための護りと、節度をもたらす恐怖心も振り落として、
彼に私を見せたのです、彼が私に見えるままに、
すっかり溶け合って。でも私たちの水の滴には違いがあったのです。
彼の滴は私に毒を与え、私の滴は彼を癒したのです。

36 現代の版では“Or”は“O”に変更されることが多い。

37 “even”は1音節。

In him a plenitude of subtle matter,
 Applied to Cautels, all strange forms receives,
 Of burning blushes, or of weeping water,
 Or sounding paleness: and he takes and leaves,³⁸ 305
 In either's aptness as it best deceives:
 To blush at speeches rank, to weep at woes
 Or to turn white and swoon at tragic shows.

彼の中には巧妙さが横溢し、
 欺瞞に使われると、驚くべき形を取るのです。
 燃えるように顔を赤らめたり、水が流れるように涙を流したり、
 気絶するかのように蒼白になったり。彼はそれぞれを使い分けました、
 どちらが適切か見計らって最も巧みに騙せるように。
 下品な話には赤面し、悲しみには涙を流し、
 悲劇的な場面を見ると真っ青になって気を失うのです。

That not a heart which in his level came,
 Could scape the hail of his all hurting aim, 310
Showing fair Nature is both kind and tame.³⁹
 And veil'd in them did win whom he would maim,
 Against the thing he sought, he would exclaim,
 When he most burn'd in heart-wish'd luxury,
 He preach'd pure maid, and praised cold chastity. 315
 ですから彼の射程に入った心は

38 Kerrigan や Roe は “sounding” を、Edward Capell が提案した “swooning” に変更している。

39 “showing” の主語が何かについては議論があるが、ここでは “heart” と考えた。

その傷つけて止まぬ狙いから射られる矢の嵐を逃れられませんでした、
 そして美しい本性は優しく従順であると示したのです。
 こうして彼は演技のヴェールに隠れて、傷つけたい者を勝ち取ったのです。
 彼は求める物を非難したものでした。
 彼が心から欲情して最も燃えていたのは、
 純潔な娘に説教をし、冷たい貞節さを褒めたたえている時でした⁴⁰。

Thus merely with the garment of a grace,
 The naked and concealed fiend he cover'd,
 That th'unexperient gave the tempter place,
 Which like a Cherubin above them hover'd,
 Who young and simple would not be so lover'd. 320
 Ay me I fell, and yet do question make,
 What I should do again for such a sake.

こうして優美さの衣服だけによって
 秘められた紛れもない悪魔をあの人は覆っていたのです。
 それで、経験のない娘たちは誘惑者に屈したのです、
 その誘惑者は智天使のように彼女たちの頭上を舞っていたのです。
 若くて初心^{うぶ}なら誰があの人を恋人にしたがらないでしょうか。
 ああ私は堕ちたのです、それでも分かりません、
 ああいうことがまたあれば、私がどうするかは。

40 “preach'd pure maid”を現代の編者は“preached like a pure maid”と解釈している。
 (As *You Like it* の “Speak sad brow and true maid” (3.2) をこの用法の例として引用することが多い。) しかし、“preach”は通常は聖職者の行為であるので、ここでは敢えて上記のようにした。

O that infected moisture of his eye,⁴¹
 O that false fire which in his cheek so glow'd:
 O that forc'd thunder from his heart did fly, 325
 O that sad breath his spongy lungs bestowed,
 O all that borrowed motion seeming owed,
 Would yet again betray the fore-betrayed,
 And new pervert a reconciled Maid.

ああ、彼の目の毒をもったあの涙、
 ああ、彼の頬に輝いていたあの偽りの炎、
 ああ、彼の心から飛び出したあの偽りの雷鳴、
 ああ、彼のすかすかした肺から吐き出されたあの悲しげな息、
 ああ、見かけは本物のように見える借り物のあの身のこなし、
 それらは、以前に裏切られた娘たちを再び裏切り、
 悔悛した娘に新たに道を誤らせるのです。

FINIS.⁴²

終

41 この連はOの多用によって性的な含みを持っている（特に行の始まりと327行）。青年の目の“infected moisture”はそれ自身が“infect”されているのだろうが、同時に女を“infect”する涙でもあるだろう。おそらくここにも両者の同一化のイメージがある。

42 多くの評者が指摘するように、この詩は娘の「語り」で終わり、語り手は、話を聞いていた老人の反応を描写することも、自分で詩全体をまとめることもない。勢いのある娘の「語り」に終始するところにもこの詩の魅力はあるのではないだろうか。Kerriganも同様の見解を示している（“[the poem ends] with the incorrigibility of passion. It makes us assent to and yet suspect the speaker, while bringing forward no Duke Vincentio or King of France to allot rough justice and focus on our own responses”. Kerrigan, 425）。